

第4節

新型コロナウイルス感染拡大を受けた防衛省・自衛隊の取組

世界的大流行（パンデミック）となった新型コロナウイルス感染症は、わが国を含む国際社会の安全保障上の重大な脅威である。その感染拡大防

止に向け、防衛省・自衛隊は、総力を挙げて様々な活動を行った<sup>1</sup>。これらの活動に従事した隊員のうち感染者はゼロであった。（令和2年5月31日現在）

第1章

わが国自身の防衛体制

1 武漢からのチャーター機への看護官派遣

20（令和2）年1月、中国における新型コロナウイルス感染症の感染の拡大により、武漢へチャーター機が派遣された。防衛省・自衛隊は、帰国邦人などへの対応として、厚生労働省からの

依頼に基づき、チャーター機における機中検疫支援を行った。第2便以降第5便まで、自衛隊中央病院の看護官が1便当たり2名ずつ乗り込み、支援を実施した。

2 新型コロナウイルス感染症に対する災害派遣

1 新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のための救援にかかる災害派遣

20（令和2）年1月、自衛隊は、中国における新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により帰国した邦人などの救援にかかる災害派遣を実施した（1月31日から3月16日まで46日間）。この際、感染拡大防止のための帰国邦人などへの支援については、特に緊急に対応する必要があり、かつ、特定の都道府県知事などに全般的な状況を踏まえた自衛隊の派遣の要否などにかかる判断に基づく要請を期待することは無理があつて、要請を待っては遅きに失すると考えられたことから、要請によらない自主派遣とした。

これを受けて、帰国した邦人などが滞在する一時宿泊施設や感染者が確認されたクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」（乗員・乗客約3,700名）において生活・医療支援、下船者の輸送支援などを実施した。具体的には、PCR検査のため、船内において自衛隊医官などにより、延べ約2,200

検体の採取を実施した。また、陽性者などの患者や乗員・乗客の下船者約2,000名を自衛隊救急車や大型バスにより搬送を実施しており、このうち各国政府（米、オーストラリア、カナダなど）が準備したチャーター機に搭乗する乗員・乗客などの帰国者延べ約1,300名の羽田空港への輸送などを実施した。

「ダイヤモンド・プリンセス号」における活動は、巨大で複雑な客船上での前例のないオペレーションであるとともに、感染リスクの高い活動で



クルーズ船乗客に対する医療支援  
（20（令和2）年2月）



動画：新型コロナウイルス感染症対応の活動

URL：<https://www.facebook.com/jointstaffpa/videos/285657902464800/>

<sup>1</sup> 具体的な活動については、防衛省HP参照。（<https://www.mod.go.jp/j/approach/defense/saigai/2020/covid/index.html>）

あったものの、本活動に従事した現地活動人員延べ約2,700名の隊員のうち感染者はゼロであった。

また、自衛隊病院などへの患者の受入れを行うとともに、医療面からサポートするため、医師、看護師などの資格を有する予備自衛官10名を招集し、対応にあたった。

本派遣の規模は、現地活動人員延べ約8,700名(活動人員<sup>2</sup>延べ約2万名)、防衛省が契約している民間船舶「はくおう」など2隻に上った。

## 2 新型コロナウイルス感染症に対する水際対策強化にかかる災害派遣

20(令和2)年3月、自衛隊は、新型コロナウイルス感染症に関して、他国からの入国・帰国者にかかる水際対策をさらに強化する政府の方針などを踏まえ、新型コロナウイルス感染症に対する水際対策の強化にかかる災害派遣を実施した(3月28日から5月31日まで65日間)。この際、水際対策の強化のための支援の実施については、特に緊急に対応する必要がある、かつ、特定の都道府県知事などに全般的な状況を踏まえた自衛隊の派遣の要否などにかかる判断に基づく要請を期待することは無理があつて、要請を待っていては遅きに失すると考えられたことから、要請によらない自主派遣とした。

具体的には、自衛隊医官などによる空港(成田、羽田)における検疫支援として約4万6,000名の帰国者・入国者のうち、約2万400名の検体を採取したが、これは3月28日から5月31日までの空港検疫全体の検体採取実施人数の約44%に相当するものとなった。また、PCR検査の結果がでるまで宿泊施設<sup>3</sup>に滞在する帰国者・入国者の空港(成田、羽田、関西、中部)から宿泊施設への輸送支援として合計延べ約6,100名の輸送、宿泊施

設に滞在する帰国者・入国者への生活支援として合計延べ約17,200名に対し食事の配分などを行った。

本派遣の規模は、現地活動人員延べ約8,700名(活動人員延べ約1万3,400名)に上るとともに、隊員の感染者はゼロであった。

## 3 新型コロナウイルス感染症に対する市中感染対応にかかる災害派遣等

20(令和2)年4月、自衛隊は、新型コロナウイルス感染症の市中感染拡大防止のため、同年4月3日に長崎県知事から災害派遣要請を受けて以降、29都道府県の知事からの要請などを受け、各都道府県に連絡員を派遣し緊密な連携を図りながら、患者空輸、宿泊施設における生活支援、自治体職員や民間宿泊施設従業員などに対する感染防護に関する教育支援(合計延べ約1,700名に対して教育)などを行った(5月31日現在)。また、長崎県の岸壁において係留中に集団感染が発生したクルーズ船「コスタ・アトランティカ号」(乗員約620名)に対して、PCR検査に必要な検体採取支援や乗員に対する医療支援に加え、CT診断車を派遣し対応にあたった。



自治体職員に対し、感染防護教育を行う陸自隊員  
(20(令和2)年4月)

<sup>2</sup> 活動人員とは、現地活動人員に加えて整備・通信要員、司令部要員、待機・交代要員などの後方活動人員を含めた人員数。

<sup>3</sup> 防衛省共済組合が運営する「ホテルグランドヒル市ヶ谷」においてもPCR検査の結果を待つ帰国者・入国者840名を受入れた。(5月末現在)



## VOICE 自衛官と共に新型コロナウイルスと闘った民間船長

ゆたか SHIPPING 株式会社  
 はくおう船長 井上 志郎

当社は16（平成28）年から、防衛省・自衛隊による部隊訓練や大規模災害への対応において、旅客船「はくおう」の運航を担っており、自衛隊の隊員や装備品の輸送、地震や風水害により被災された方々へのサポートを行ってきました。

今般の新型コロナウイルス感染症の拡大に対しては、当初、武漢からの帰国者の一時宿泊施設として船を活用したいとの防衛省からの緊急の連絡を受け、船員を全国から緊急招集するとともに、「はくおう」の出港準備などを行い、20（令和2）年1月31日に母港の相生港（兵庫県）を出港し、翌2月1日には東京湾に到着しました。通常は出港準備のために約72時間を必要としますが、今回は関係者一丸となって準備に取り組んだ結果、約32時間で出港準備を整えることができました。

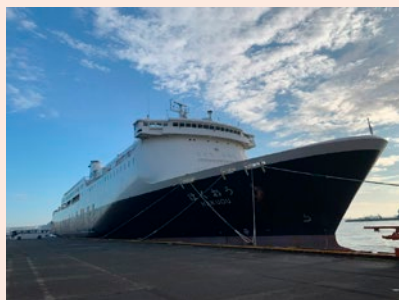
その後、海上自衛隊の横須賀基地（神奈川県）に移動して、帰国者の受け入れが必要となった場合に備えて、寝具や生活用品などを積載して準備を整えていたところ、大型クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」において多くの新型コロナウイルス感染者が発生したことから、「ダイヤモンド・プリンセス号」に対する医療支援や生活支援を行う自衛隊員の方々の活動拠点として活用するため、急遽、「はくおう」を横浜港の本牧ふ頭に移動することとなりました。

突然の業務内容の変更のため当初は戸惑いもありましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大を防止する自衛隊の任務を直接支えるという大変重要な役割を担うことができるという思いを胸に、作業を実施

しました。約1か月間の横浜港における災害派遣活動の間、自衛隊員の方々は、早朝から「はくおう」を出発して真夜中に戻ってくるといった多忙な勤務環境にありましたので、私たちとしても深夜まで入浴のためのボイラー作業などを行ったり、船内で栄養バランスに気を配って調理した食事を隊員の方一人一人に召し上がっていただくことにより、隊員の方々の疲労回復や栄養補給が十分なものとなるよう努めさせていただきました。「ダイヤモンド・プリンセス号」において活動した自衛隊員から一人の感染者も発生しなかったことについて、私たちが行ってきた活動支援がその素晴らしい結果に貢献できたものと自負しており、このことは私たちの大きな財産にもなりました。

一方、当初、新型コロナウイルスは私たちにとっても大きな不安材料でありましたが、隊員の方々と船員の行動区画をしっかりと区分するとともに、自衛隊の衛生隊員の方々から感染を防ぐための教育を受けることにより、船内における十分な感染防止対策が確立されたため、当初抱いていた不安を払拭して業務に臨むことができました。

新型コロナウイルスの感染拡大はこれまでに日本が経験したことが無い国難であり、私たちも様々な苦労を伴いましたが、今回の対応を通じて大変貴重な経験を得ることもできました。新型コロナウイルスの感染拡大が一日も早く収束することを心より祈念するとともに、今回得られた知見や経験を糧にして、今後も自然災害などの緊急事態が発生した時には速やかに「はくおう」を出港させることにより、自衛隊のお役に立てれば幸いです。



「はくおう」  
 （本牧埠頭にて02（令和2）年3月15日）



「はくおう」艦橋における筆者



活動に際しての事前教育

## 解説

## 「見えない敵（新型コロナウイルス）との戦い」～二次感染者ゼロの達成～

自衛隊は、防衛大臣命令に基づき、20（令和2）年1月31日から3月16日までの間、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のための救援にかかる災害派遣を実施しました。

この間、災害派遣に従事した隊員は、政府施設における帰国邦人などや大黒ふ頭におけるクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の乗員・乗客に対する各種支援を実施するとともに、新型コロナウイルスという「見えない敵」と戦い、自衛隊員の二次感染者ゼロを達成することができました。

本災害派遣を自衛隊員の二次感染者ゼロで終結できたのは、防衛省・自衛隊として勤務区分に応じた防護基準などを常に見直すとともに、これを各級指揮官が徹底したことに加え、隊員一人一人の高い防護意識の成果です。ここでは、その防護基準、健康管理基準、環境整備などの要領について解説します。

まず、防護基準は、現地活動に際し、業務内容に応じて、着用すべき防護装備を定めたものです。最上限は感染防護服の着用であり、最下限はマスク、ガウン及び手袋のみの着用です。

次に、健康管理基準は、現地活動終了後、活動の感染リスクに応じて「個室で経過観察」するか「所属部隊へ復帰し健康観察」するものとし、全員PCR検査を実施することを定めたものです。（結果とし

て「陽性」となった隊員はいませんでした。PCR検査が「陽性」の場合は、自衛隊中央病院へ入院となります。自衛隊中央病院では、外国人を含むクルーズ船の乗員・乗客や帰国者などにおける陽性患者の対応のほか、PCR検査などを実施しました。）

最後に、環境整備の要領は、消毒、ゾーニング（感染の危険のあるホットゾーンと安全なコールドゾーンに区画分け）及び廃棄物処理などの実施要領を定めたものです。

また、陸上総隊は、感染防止に関する知識を有する陸自の対特殊武器衛生隊などの隊員をもって派遣部隊を編成したことにより、その知見を活かした防護の徹底及び海上・航空自衛隊の派遣隊員に対する教育を実施できました。

さらに、横須賀地方隊や航空総隊も医務系統により感染防護を積極的に実施して、自衛隊員の二次感染者ゼロを達成しました。

これらは、各部隊の日頃のNBC訓練の成果に加え、十分な食事、休養、入浴による良好な健康状態の維持、最前線で災害派遣に従事する隊員のほか、指揮所勤務や後方支援（派遣隊員が宿泊した「はくおう」や民間船舶「シルバークイーン」の役務監督を実施した中央輸送隊を含む。）に当たった全ての隊員の努力が一つに繋がった成果です。



中央病院におけるゾーニング



感染防護教育



「はくおう」における食事

## ③ 自衛隊病院などにおける取組

自衛隊病院や防衛医科大学校病院においては、20（令和2）年2月1日から新型コロナウイルス患者を受入れている。自衛隊中央病院及び防衛医科大学校病院は、各々東京都、埼玉県から第一種感染症指定医療機関（厚生労働大臣の定める基準に適合し、第一類感染症に対応できる陰圧室等を

兼ね備えた病床を各々2床保有）に指定されており、常時、感染症患者を受入れられる態勢を整えていたが、患者数の増加に対応し患者の受入れを一般病床まで拡大した。また、自衛隊札幌病院などの地区病院においても、地元自治体の要望を受け、患者の受入れを開始した。特に「ダイヤモンド



ド・プリンセス号」における感染者を受入れた自衛隊中央病院においては、患者104名の症状に基づく分析結果を短期間のうちにとりまとめ、20（令和2）年3月19日に発表した。これまでに、自衛隊病院及び防衛医科大学校病院において、430名の新型コロナウイルス感染症患者を受入れた（5月31日現在）。

さらに、自衛隊中央病院及び防衛医科大学校病院は、富士フイルム富山化学株式会社が開発した「アビガン錠」の新型コロナウイルス感染症に関する治験を開始した。防衛省においては、20（令

和2）年3月から、未承認薬の人道的な使用の枠組みでアビガン錠による治療経験を積むとともに、アビガン錠が新型コロナウイルス感染症の治療薬として正式に承認されるために必要となる治験による有効性の確認のプロセスにも参加した。

防衛省・自衛隊は、新型コロナウイルス感染症の治療に取り組むことにとどまらず、新型コロナウイルス感染症に対する治療薬の開発にも協力することを通じて、新型コロナウイルス感染症との闘いにおいて、積極的に役割を果たした。

## VOICE

### 新型コロナウイルス感染症への対応

自衛隊中央病院（東京都世田谷区）

呼吸器内科医官 1等陸尉 こだま たつや 児玉 達哉

私は、20（令和2）年2月より自衛隊中央病院で新型コロナウイルスに感染した患者の診療に従事しています。特に、重症患者対応班として、人工呼吸器などを必要とする重篤な症例に対し、様々な診療科の医官と診療科の枠組みを超えて意見を出し合い、力を合わせて診療にあたっています。

当院は、2月上旬より、武漢からの帰国者や、クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の乗員・乗客を皮切りに新型コロナウイルス感染症患者の受け入れを開始しました。当初は、感染症の病態や治療に関して不明な点が多いことや、院内感染のリスク

や海外からの患者の受け入れにおける言語の壁もあり、医療従事者や病院職員は肉体的にも精神的にもストレスを感じながら任務にあたっていました。

しかし、担当した重症の方々が回復・退院された際には、医療者として大きな充実感を味わうことができました。また、この国難の最前線で働くことができ、さらにこの感染症に関する新たな知見の発信や院内感染防止の取組が高い評価を得たことを、医官として誇りに思っております。今後、この経験を後輩に伝えていくとともに、次なる新興・再興感染症の流行への対応に活かしていきたいと考えています。



感染症対応医師による電子カルテを用いたミニカンファレンス  
（筆者：前列右）



重症患者対応時の個人用防護具を装着した筆者  
（筆者：左）

解説

ドイツ人ご夫妻からの感謝状の紹介

自衛隊の新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のための災害派遣の中には、「ダイヤモンド・プリンセス号」の乗員・乗客である外国人の方々の自衛隊中央病院への受入等支援も含まれています。災害派遣に従事した部隊などは、彼らを含めた乗員・乗客のために熱心に活動し、災害派遣活動を成し遂げました。

ここではドイツ人のヤンセン・オニールご夫妻から頂いた、陸幕長に対する感謝状をご紹介します。ご夫妻は「ダイヤモンド・プリンセス号」の乗客であり、自衛隊中央病院に入院され、その後帰国されました。

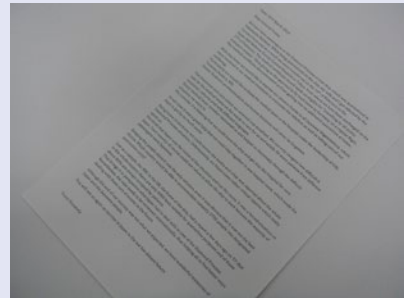
帰国後、ご夫妻から、「自衛隊中央病院の医療チームには特に感謝しております。彼らのプロ意識と親身な対応は決して忘れません。我々が受けた対応は

素晴らしいもので、多国籍の患者が病棟にあふれ返り、医療スタッフにとって困難な状況にも関わらず、全医療スタッフは入院して不安な我々を歓迎し、熱心に支援して下さいました。(中略) 日本と日本人との良い思い出が出来ました。」との感謝状を頂きました。この感謝状を頂いたことについては、20(令和2)年4月24日に行われた日独防衛相電話会談の際に、河野大臣から言及し、クランプ=カレンバウアー独国防大臣からも、自衛隊の対応に対する感謝の意が示されました。このような感謝状を頂いたことは、今回の災害派遣活動が日本のみならず、世界のためにもなったことの象徴であり、自衛隊にとって誇りです。

今後も、自衛隊は、日本の防衛及び世界の安定と平和に貢献していきます。



自衛隊中央病院に入院中のヤンセン・オニールご夫妻



ご夫婦から頂いた陸幕長に対する感謝状

4 国内外に向けた情報の発信・共有に向けた取組

防衛省・自衛隊は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、「自衛隊式」感染防止対策を公開<sup>4</sup>するとともに、各国の防衛当局に対し、大使館などを通じて、新型コロナウイルス感染症に対する自衛隊の活動、「ダイヤモンド・プリンセス号」における活動中、隊員に感染者が出なかった要因



動画：自衛隊式感染症予防(マスク脱着編)  
URL：<https://youtu.be/F5TbW0G8NQs>



動画：自衛隊式感染症予防(手洗い編)  
URL：<https://youtu.be/5QXtgrUJnCM>



動画：自衛隊式感染症予防(咳エチケット編)  
URL：<https://youtu.be/4KWZ7bvj21M>

<sup>4</sup> 統幕HP「新型コロナウイルスから皆さんの安全を守るために」([https://www.mod.go.jp/js/Activity/Gallery/images/Disaster\\_relief/2020covid\\_19/2020covid\\_19\\_guidance1.pdf](https://www.mod.go.jp/js/Activity/Gallery/images/Disaster_relief/2020covid_19/2020covid_19_guidance1.pdf))

及び自衛隊中央病院における症例分析の概要などについてとりまとめた資料を共有した。

さらに、河野防衛大臣は4月以降、米国、オーストラリア、インド、フィリピンなどの東南アジア諸国、英国、フランスなどの欧州諸国、カナダ、ニュージーランドといった15か国<sup>5</sup>と防衛相電話会談を実施し、新型コロナウイルス感染症が世界的に拡大している現状を踏まえ、防衛当局の役割などについて意見交換を行った。特に日米防衛相電話会談については、4月から5月にかけて2度実施し、ともに新型コロナウイルスとの闘いに打ち勝つために連携・協力していくことに加えて、このような中でも日米の緊密な連携及び対処能力の維持を図っていくことなどを確認した。このほか、各国との電話会談では、主に防衛当局として感染症対策を行う中で得られた情報・教訓・知見

を共有していくことで一致するとともに、防衛当局の役割などの観点から、現状を踏まえた脅威認識や感染症の拡大が各国の防衛政策に与え得る影響に関する認識を共有していくことの必要性を確認し、また、防衛当局間のコミュニケーションを継続するとともに、「自由で開かれたインド太平洋」の維持・強化に向け、防衛協力・交流を引き続き強力に推進していくことで一致した。

新型コロナウイルスの感染が拡大する状況だからこそ、諸外国との間で意思疎通を積極的に行うことは重要である。また、新型コロナウイルス感染症終息後の国際秩序のあり方には高い関心を払う必要があり、これまでの世界の平和と繁栄を支えてきた自由で開かれた国際秩序が揺らぐことのないよう、価値や利益を共有する諸外国との間で、一層の連携が必要であると考えている。

## 5 防衛省・自衛隊における新型コロナウイルスの感染拡大防止に向けた取組 ……

国民の命と安全を守ることを目的とする防衛省・自衛隊が、その活動によって、これらを脅かすような事態があってはならないとの認識のも

と、教育訓練、勤務態勢、行事の開催及び部外者の来訪などについて、他者との接触を低減する取組を強力に推進している。

## 6 その他の取組 ……

20（令和2）年5月29日、新型コロナウイルス感染症に対応中の医療従事者などに対し、共に対応にあたっている防衛省・自衛隊として敬意と感謝の意を表するため、東京都心上空において、ブルーインパルスによる飛行を実施した。



医療従事者などに対する敬意と感謝を示すため飛行するブルーインパルス（20（令和2）年5月）

▶

**動画：**新型コロナウイルス感染症へ対応中の医療従事者等に対する敬意、感謝を示すためのブルーインパルスによる飛行

**URL：** <https://www.youtube.com/watch?v=tP6CFDQTrVs>

<sup>5</sup> 防衛相電話会談を実施した国は、会談実施順にフランス、ドイツ、米国、英国、カナダ、オーストラリア、インド、フィリピン、ニュージーランド、シンガポール、インドネシア、イタリア、モンゴル、アラブ首長国連邦、パプアニューギニアの15か国。（6月16日現在）